



国際ボランティアワークキャンプ in ASO  
10周年記念誌



～ 10年間の“<sup>つながり</sup>継”～

国際ボランティアワークキャンプ実行委員会

## 国際ボランティア ワークキャンプ in ASO

# 10th ANNIVERSARY

## index

### 国際ボランティア ワークキャンプ in ASOとは

ボラキャンの歴史	02
ボラキャンの10年間	
第1回～第10回大会の全体写真	03
ボラキャン始動 故榊定信さんの熱意	04
いのち、平和、未来	05
第1回 手探りから始まる、国際ボランティアセミナー	06
第2回 高校生による高校生の活動が始まる	07
第3回 高校生が考え、行動した「環境」とは	08
第4回 これからも、Challengers	09
第5回 いろんな出会いがあったボラキャン！ これからも「Talk+○○=Smile」!!	10
第6回 私とボラキャン	11
第7回 俺が掲げる、君と繋ぐ	12
第8回 私とボラキャン ○○の可能性	13
第9回 思いやりの輪 ～みんな同じ空の下～	14
第10回 素晴らしい出会いと思いをありがとう	15
応援団のメッセージ	16
参加者の思い出	18
～10年間の“継”～の発行にあたって(お礼)	19

## 国際ボランティア ワークキャンプ in ASOとは

高校生、大学生等若い世代の「生きる力」を育むための活動です。

21世紀の教育におけるキーワードを、「国際」と「ボランティア」と位置づけ、地球市民としての資質を磨き、豊かな社会を築くための「生きる力」を、高校生、大学生らが自ら考え、話し合い、将来の実践に結びつけていきます。また、社会貢献活動に取り組んでいる様々な団体、個人と出会い、対話を通して自己を取り巻く社会を知る機会です。

おかげさまで、本ワークキャンプは、「ボラキャン」の愛称で広く知っていただくまでに成長しました。  
(以下「ボラキャン」という。)

## ボラキャンの歴史

2006年、ボラキャンは、国際ボランティアセミナーとしてうぶ声をあげました。全国高校ユネスコ研究大会終了で、また一つ若者が生きる力を養う場が消えることを危惧した一人の高校教諭の熱意によって計画されたものでした。当時熊本県立玉名高等学校定時制教諭だった故榊定信さんです。

前々年2004年、芦北で、最後の全国高校ユネスコ研究大会が開催されました。

前年2005年、熊本で第14回全国ボランティアフェスティバル火の国くまもとが開催され、国際交流・協力の分科会で全国の高校生が身近な国際交流・国際協力をテーマに、地球上の一人ひとりの生活を豊かにするため、地域の多文化共生や国際貢献について話し合いました。熊本の高校生が実行委員として企画に係わり自ら何かを創り上げていきたいという下地がしっかり出来あがりしました。

第1回ボラキャン(国際ボランティアセミナー)は、昭和女子大学教授の興梠寛さんに「ボランティアから世界が見える」、ニッケイ新聞東京支社長の藤崎康夫さんに「ブラジル移住100周年と国際化」、そして、アジア砒素ネットワークの川原一之さんに「Bangladeshからの報告」と題して、社会との係わりを考える素晴らしい講演をいただきました。ところがセミナーの裏側は、高校生が企画に携わることなく、内容は大会の5日前にはじめて知らされ、配付資料作りをした現実がありました。大会終了後直ぐに、高校生実行委員会(以下「EC」という。)メンバーは自分達の思いが実行出来なかった悔しさに涙して、次回に向けて反省会を行いました。

2007年3月、榊定信さんが急逝され、後継者不在で熊本県高等学校文化連盟国際ボランティア部会は活動休止に追い込まれましたが、榊さんの病床で興梠さんが聞かれたボラキャン継続の遺言が、熱い思いの高校生と近代経営研究所、熊本ユネスコ協会、JICA九州国際センター、熊本市国際交流振興事業団の出資団体等多くの応援団で構成するボラキャン実行委員会へ受け継がれました。この時、大会名称は、話し合いで「国際ボランティアワークキャンプ」に変わりました。とにかく高校生が企画から実施までやり抜くことを目標にしました。不安の中、第2回ボラキャンは、高校生、大学生(留学生を含む)合わせて146名を集め開催出来ました。それでも高校生は終了即日の反省会でさらなる深化と発展を望んだのでした。

ボラキャンの歴史が始まりました。それは、参加の「カタチ」の深化と発展の歴史であったと言えます。榊さんに与えられた役割参加は、大会を重ねる毎に、高校生の主体的な参加、参加者全体を巻き込みながら、大人にまで影響を与えるようになりました。

そして、今年2015年度、第10回を迎えることが出来ました。

本誌ではボラキャンの10年間の継(つながり)を振り返ります。楽しかったこと、苦しかったこと、多くの友との出会いや色々な想い出が浮かび、また新たな未来へつながっていきます。



\*第10回の  
ECメンバー



\*第1回から第10回大会の全体写真(集合写真の撮影は、会期が2泊3日となった第5回大会から始まりました。)



# ボラキャン始動 故榊定信さんの熱意

(令夫人榊朱美さんへのインタビューより)



▲英国でアレックディクソン氏訪問 (右端、若き日の榊定信さん)

2004年当時、ユネスコ協会連盟主催の全国高校ユネスコ研究大会が終了することになりました。教育現場の経験から「高校生の“生きる力”を養う場を絶やしてはならない!」、そんな教師の熱い思いからボラキャンが始動しました(2006年11月11・12日、国際ボランティアセミナーとして阿蘇青少年交流の家で開催)。2007年3月に他界された榊定信さん、その人です。ベトーヴェン等中世西洋音楽家のような髪型、自ら最先端ファッションと自負されたタイ国仕立ての半袖の背広は、一度会ったら決して忘れない風貌でした。残念ながら今その姿はありません。しかしながら、榊さんが追い求められた“自ら社会のために行動する”ボランティア精神の学びは、語り継がれる榊さんの伝説と共に、脈々とボラキャンの10年間の歴史の中で受け継がれてきました。

## いつでも生徒を一番に。

学生運動の最中に熊本大学を卒業された榊さんは、矢部高等学校を皮切りに蘇陽高等学校、熊本工業高等学校、玉名高等学校を最後に退職される直前まで、県立高等学校の国語教師として人生を送られますが、演劇部、新聞部、同和教育、進路指導、ボランティア活動と、一貫して学校の授業より社会や地域とのつながりを大切にされ、生徒たちと一

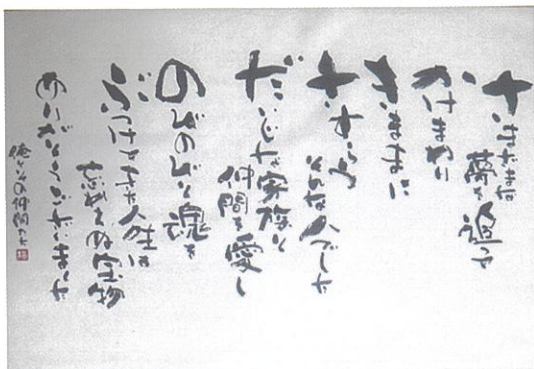
緒に新聞の取材に駆け回り、部落問題では地域を飛び回られていたそうです。進路指導担当時は度重なる出張で、夏休み・冬休み期間は殆ど家にいないほど就職先企業を訪問されました。出張先では趣味を兼ね歌声喫茶等に卒業生を呼び出しては夜遅くまで話し込み、卒業生が仕事に悩み・不安と言えば会社まで訪問して上司と話し合われることもあったそうです。今もご自宅に飾られている教え子の方からのメッセージ額が、榊さんの人柄を物語っています。「つながっていく!」まさにボラキャンの歴史に受け継がれています。

生徒一人ひとりと向き合う姿にも多くのエピソードがあります。生徒の喫煙退学処分を話し合う会議では、「1回の過ちで生徒の将来を閉ざすべきでない」と最後まで主張されたそうです。ご息子が酔っ払いに絡まれ顔面が別人になるぐらい殴られた事件があり、その加害者は教え子だったそうです。怒りを抑え、更正を信じ、訴えを取り下げられました。

## 「生きる力」のつながり!

一人ひとりが主役であり、かけがえのない多くの友とつながっていきます。そのつながりの中で、一人ひとりが社会や地域で必要とされる自分を自ら発見し、成長していきます。ボラキャンのテーマである「カタチ」になり、多くの高校生に受け継がれています。

榊定信さん、これまでボラキャンへ参加、協力いただいた皆さんに心から感謝申し上げます。そして、ボラキャンはさらにつながっていきます!



▲ご自宅に飾られた教え子の方から贈られたメッセージ  
「俺とその仲間たち」 ※「俺」が榊さん

# いのち、平和、未来

榊定信さんから高校生へのメッセージ (第一回よりご指導いただいた興相寛さんにボラキャンの10年間を振り返っていただきました。)

## 「辺境から中央を撃つ」

榊定信さんとの出会いは、この言葉に魅せられたことからでした。その当時の私は、イギリスで学んだ教育社会学の成果を活かして、日本の学校教育にボランティア活動とおした実践的な教育を提案しようと考えていました。

『学校と地域社会』『グラスルーツ』などを創刊し、社会問題に児童生徒が取り組んでいる全国の優れた教育実践の事例を探していました。そのとき、眼に留まったのが、熊本県立蘇陽高等学校・新聞部の実践事例でした。全国の新聞コンクールで最優秀賞を受賞した新聞の一面トップを飾る記事の大見出しに引きつけられました。「辺境から中央を撃つ」という衝撃的なタイトルでした。

高校生たちは、宮崎県高千穂町の土呂久(とろく)公害の現場を訪ね、かつて亜ヒ酸中毒の被害にあった村人を訪ね歩き、日本の戦前・戦後の歴史の陰でさまざまな苦汁を舐められられ国家の犠牲となった、従順で温和な人びとの姿を描きました。その精力的な取材活動は、水俣の公害被害者、韓国・慶州のナザレ園の保護を受けながら老いていく日本人戦争未亡人、地域に残る卑劣な人間差別の現実、障がい者の社会参画への壁、さらには開発途上国の貧困の罨、民族紛争や宗教間対立に苦しむ人びと、国家間の戦争に翻弄される民衆まで、新聞の特集は多岐にわたるものでした。

こんな新聞取材し編集する高校生たちを指導助言している教師はどんな人だろう。ぜひ会ってみたい。そう考えた私は、幸運なことにユネスコ教育活動をしている友人に紹介され、会えることになりました。

## ふる里を離れる子どもたちに 人間としての力をつけさせたい

さっそく、榊さんの職場、蘇陽高等学校を訪ねました。

当時の蘇陽町(現在は町村合併により山都町になり、蘇陽高等学校は矢部高校と合併)は“九州のへそ”と呼ばれるおだやかな美しい町で、通潤橋をはじめ優れた文化財や独特の祭祀のある魅力的な町でした。

学校の受付で、榊さんにお会いしたいとお願いすると、保健室にいるとのこと。さっそく、保健室を訪ねました。



▲ 第1回大会での興梧さんの講演  
「ボランティアから世界がみえる」

部屋に入ると、ベッドの上に小太りの男性が横になっています。汗をかきながら、大きな笑い声を響かせ、若い女性の養護教諭とおしゃべりをしていました。そのファッションは、カッターシャツに短パン、ゴムスリッパ履きという、高校生たちにとっては、似顔絵や漫画に描きやすい典型的なタイプです。思わず笑ってしまいました。

私が想像した、鋭い問題意識と洗練された文章表現をするインテリ教師とは、とても似つかない“怪人物”が目の前に現れたという印象でした。

榊さんは、熊本県立済々黌高等学校、熊本大学を卒業し、国語の教師として県立矢部高等学校の教諭を経て、蘇陽高等学校に着任しました。矢部高等学校では、人形劇部を指導し、蘇陽高等学校では新聞部を指導しながら、同和教育や高校ユネスコ活動、進路指導などに情熱を注いでいました。

ようやく、ベッドから体を起こして、つぎのような話をしてくれました。

「地方の多く子どもたちは、就職や進学で住み慣れた自分の町を離れていきます。そして、さまざまな困難を克服していかなければなりません。そのときに大切なことは、自分のふる里に対する愛着と誇りです。たくさん体験をとおして、うんと人間力をつけさせる。そうすれば、困難を克服し、学び直しも、生き直しもできる」

最大の教育者は、地域に生きる生活者の知恵と経験だと榊さんは言います。とくに、辺境の地に生きる人びとや、国家が切り捨ててしまった人びと、社会が片隅に追いやった人びとやコミュニティから学ぶことなのだ、と情熱的に語ってくれました。

私は、その言葉に激しく共感しました。そして、その場で意気投合し、同志の絆を結び、生涯の友を得ることができました。

## 抑えきれない好奇心と 型破りな行動力の“怪人”と出会った

人が生きるうえで最大の幸せを感じるのは、社会的な価値基準にとらわれることなく、自分がしたいと思うことを見つけ、それを実行することです。

その源泉は、私たちの心のいちばん奥深いところから湧きあがってくる情熱ではないかと思ひ

ます。その情熱のなかから聞こえてくる声に、夢中になって行動することこそ、至福の人生です。

とはいえ、私たちはさまざまな自己規制が心を覆い、自分をごんじがらめに縛ってしまいます。こんなことをすれば、社会的に大切なこととわかってはいても、他人に迷惑をかけるのではないかと、自分の将来に不利になるのではないかと、自己規制をしてしまいがちです。そうした“分別のある生き方”は、既存の組織の安定にとっては必要なことですが、組織や社会に変革をもたらす“ソーシャル・イノベーション”を起こすことは不可能です。

榊さんは、好奇心を抑えられなくて、思い立てばすぐに動いてしまう、という典型的な教師仲間を泣かせる人物です。おそらく、迷惑を被ったと考えた周囲の人も多かったのではないかと思います。しかし、教師としては、管理職にもならず、生徒たちに寄り添おうとして“生涯一教師”を貫いた、超一流の教育者であることは、間違いありません。

## いのち・平和・未来をメッセージに 全国の高校生が集う

私は、日本のボランティア活動推進機関の草分けの役割を果たした社団法人『日本青年奉仕協会』（JYVA）の研究開発担当として、1981年から「10代のボランティアが集い創る活動文化祭」（活動文化祭）を企画提案しました。

この企画は、「いのち、平和、未来」をテーマに、10代のボランティアによって企画運営し、中・高校生がともに助け合いながら共同生活を行い、各学校の実践活動の発表、社会問題に取り組む現場を訪ねるテーマ別フィールドワーク、みんなで協働作品を創る表現の広場ワークショップ、全体参加の討論会などによって構成されたプログラムです。最盛期には、全国から500人以上の中・高校生が参加し、会場は全国の各県を巡回して15年間にわたって継続的に実施されました。

そこに生徒たちを引率してきた教師たちによって『全国ボランティア学習指導者連絡協議会』（後に、『日本ボランティア学習協会・学会』に改組し、大学教育や社会教育、NPO・NGOなども含めた研究・実践者の研究ネットワークに拡大）も組織されました。

榊さんは、私の誘いに応えて、やがてそうした『活動文化祭』や連絡協議会運営の中核的存在として、国内や海外のボランティア学習や市民教育などの調査研究や普及啓発活動に参加するようになりました。

榊さんは、その『活動文化祭』をモデルにして、熊本の高校生が集い創る国際ワークキャンプを誕生させたいという想いを持つようになり、『高校生国際ボランティアワークキャンプ』の誕生へと実を結んでいきました。

## 若者たちが繋いでいく “榊スピリットのリレー”

国立阿蘇青少年交流の家を会場にして、第1回の国際ボランティアセミナーをするから来いという連絡を受け、会場に駆けつけました。

残念なことに、短期間で組織された高校生実行委員会は、榊さんのめざすプログラム・イメージをよく理解する時間もありませんでした。仲間同志で企画検討をする余裕もなかったために、榊さんのプログラムについていっただけで精いっぱいの状態でした。恐らく、高校生たちにとってみれば、先生の想いに振り回された、右往左往のプログラム運営だったことでしょう。

にもかかわらず、榊さんの想いに共鳴して“友情出演”してくれた人びとは“豪華”な顔ぶれでした。土呂久公害被害者を記録しつづける作家で『アジア砒素ネットワーク』の川原一之さん、水俣で伝統的和紙づくりをつづける『浮浪雲工房』の金刺順平さん。熊本市国際交流振興事業団の八木浩光さんをはじめ国際交流や国際協力NGO活動を行っている人びとの協力の輪がありました。

プログラムが終わり、最大の課題は、この企画をとともにささえてくれる熊本県内の教師がいないことでした。それでも、榊さんは苦にもせず、つぎなる構想について情熱をこめて語っていました。気づいた者がやらなければ、教育は変えられない。それが、いつもの口癖でした。

その年の暮れに、榊さんは病に倒れ、翌年の3月に旅立ってしまいました。

私は病と闘う同志を励ますために病院を訪れました。ベッドに寄り添いながら、つぎのプログラム構想を3日間にわたって話しあいました。末期がんの激しい痛みにも苦しむ榊さんでしたが、可愛がっていた高校生たちの話題や、国際ボランティアワークキャンプの話題になると、目を見開き、嬉しそうな表情を浮かべて、懸命に言葉を発しようとしてくれました。私には、そのメッセージのすべてが理解できていました。

榊さんのメッセージは、高校生たちにも届いていました。

はじめてのプログラムをふりかえり、つぎなる課題を胸に刻みながら、かならず自らの手で第2回目のプログラムを成功させたいという、志のある高校生たちに。

そして、その精神のリレーは、もう10年になるのですね！



こうろき ひろし  
興梧 寛 さん

・昭和女子大学  
グローバルビジネス  
学部教授  
・日本ボランティア  
学習協会・学会  
代表理事



# 第1回 国際ボランティア セミナー

## 手探りから始まる、 国際ボランティアセミナー

第1回実行委員長 日尾野 愛さん  
(九州大学大学院 人間環境学府 都市共生デザイン専攻)

### テーマ ～21世紀を生きぬく力を育む～ 地球市民になるう

### 開催情報

2006年11月11日(土)、12日(日)  
国立阿蘇青少年交流の家

参加者/70名(参加費1,600円)

主催/熊本県高等学校文化連盟  
国際・ボランティア部会  
熊本県高等学校国際教育研究協議会

共催/熊本県国際協会、  
JICA九州国際センター  
国立阿蘇青少年交流の家、  
(財)熊本市国際交流振興事業団

後援/熊本県青年海外協力協会、  
熊本県JICA派遣専門家連絡会

### 大会概略と特長

講義形式、傾聴型の大会でした。  
現「未来職道」\*の元になる活動として  
ワークショップ「国際人との出会い」を開  
催、国際協力機関、NGO、ボランティア  
団体、大学等がブースを設置して自由に  
高校生と話し合いました。

- 第一講座 「ボランティアから  
世界が見える」  
昭和女子大学教授  
興梠寛さん
- 第二講座 「ブラジル移住100周年と  
国際化」  
ニッケイ新聞東京支社長  
藤崎康夫さん
- 第三講座 「ハングラデシュからの報告」  
アジア砒素ネットワーク  
川原一之さん

※国際、ボランティアに関係ある団体がブース  
を持ち、高校生が会場を自由に歩き回りな  
がら話し合うことが出来るプログラム

第一回目のボラキャンは本当に手  
探り状態から始まりました。

「国際協力って何?」「多文化共  
生って何?」知りたい…そしてみんな  
にも知ってもらいたい…という思い  
が出発点だったように思います。

第一回目は、興梠先生をはじめ  
様々な方にお話していただくという  
講義形式のプログラムでした。まずは、  
「知る(しってもらおう)!!」という  
ところからスタートしたボラキャンで  
すが、回を重ねるごとに「自分たちで考  
えてみたい!」とグループワークを増  
やした形へと変化していきました。

何がしたいのか、何を知りたいの  
か、知ってほしいのか…何をみんな  
で考えたいのか…。ボラキャンは、自  
分たちの思いを形にすることの出来  
るプロジェクトでした。

自分たちの頭で考えて行動する。  
普段の学校の授業では学ぶことが  
難しい、けれどもとても大切な学び  
方、社会との関わり方を学ぶことが  
できたことは本当に私の宝物だと思  
っています。

また、ボラキャンでは留学生や他  
の学校の生徒…大人から子どもまで  
様々な人たちと時間と空間を共有で  
けるといところも魅力の一つだと思  
います。

自分とは違う状況に置かれている  
人たちの話を聞いたり、別の考え方  
の人に触れることで、自分がある特  
定の文化の見方をしていること、特  
定のメガネをかけていることに気づ  
くことができました。誰かと意見が異  
なった時どうしても理解出来ない  
時、この人はなぜこういう風に考える  
のだろう?この人にはどのように見え  
ているんだろう?と不思議になるこ  
ともありました。そんな時に、それぞ  
れの見方が違うこと、浸っている文  
化が違うことを理解し、自分の文化  
の見方から見るのではなく、時には  
相手とメガネを交換してみることが  
必要なのかもしれないと考えたこ  
とを今でも覚えています。

今後もこのボラキャンが、その  
時々に必要なと思うテーマを学生が  
主体的に選び、自分たちの頭で考  
えて行動する、そういった体験がで  
きる、そして新しい世界に触れる機  
会を提供しつづけるボラキャンであ  
ってほしいと願っています。



▲大会終了後、熊本市国際交流会館に戻り、反省会合間のワンショット(筆者:右から3番目)



▲EC、構成団体スタッフが一緒に事前合宿を行いました。(筆者:前列右端)

## 高校生による 高校生の活動が始まる

第2回副実行委員長 井手口 香純さん(熊本市 健康福祉子ども局)

第2回ボラキャン実行委員会は、第1回ボラキャンを率いてくださった故・榊先生のご意志を継いでいきたいという思いから発足しました。「国際」・「ボランティア」といったテーマは引き継ぎつつも、「高校生の参加者同士がより積極的に意見交換できるようにしたい!」と、当時参加していた「全国高校ユネスコ研究大会」からアイデアを取り入れ、「分科会」を企画。高校生主体の「多文化共生」「国際環境」「国際協力」「国際平和」「国際福祉」の5分科会を設置し、実行委員の事前合宿も行って、準備万端意気込み勇んでいざ開催!—でしたが、終わってみれば、段取りに失敗したり、意見交換が一部の人に偏ってしまったりと思ったようにはいかず、ボラキャン終了後に国際交流会館へ帰ってきて早々、意気消沈の大反省会を行ったことは、今でもとても記憶に残っています。

あれから8年ほど経過し、ボラキャンが開催10回目を迎えたと言われました。正直に言いますと、私は、ボラキャンの今の活動ぶりを知るまでは、自分の上手いかなかった部分が先に立ち、ボラキャン自体苦い思い出となってしまっていました。しかし、ボラキャンも10回目を迎え、各回の内容を伺ったり、報告書を見せていただいたりするなかで、第2回で

始めた「分科会」や「事前合宿」、「反省会」を今でも引き継いで行っていることや、各回でボラキャンをよりよいものにするために様々な工夫をされているということを知り、当時手探り状態で始めた活動が、ここまで繋がりを広げ、発展しているのかととても嬉しく感じています。

ところで、各回のボラキャンの報告書を見ると、全ての見開き1ページ目にボラキャンの目的として、『『生きる力』を育む』との言葉がありました。今回こうして振り返る機会をいただいで、ボラキャンを通して学んだ、相手を理解しようとする努力や、自分の考えを他の人に発信していく姿勢は、日々の仕事や周りの人と接する場面でもとても重要なことだと感じました。現在私自身、世界をフィールドに仕事をしているわけでも、ボランティア活動に積極的に関わっているわけでも残念ながらありませんが、ボラキャンで培ったことを今後も大切にしていきたいと考えていますし、ボラキャンの活動が今後参加する高校生の大切な思い出であり、その後の人生の何らかの糧となりますよう、陰ながら応援させていただければと思っています。

### テ マ

#### 「若い人材」の「生きる力」を育む

◎以後のボラキャンで、一貫した大会テーマとなりました。

### 開催情報

2007年11月23日(金・祝)、  
24日(土)

国立阿蘇青少年交流の家

参加者/146名(参加費3,000円)

主催/国際ボランティアワークキャンプ  
実行委員会  
構成団体\*

共催/日本ボランティア学習協会、  
熊本県国際協会

後援/熊本県教育委員会、  
熊本日日新聞社、  
(社)日本ユネスコ協会連盟、  
九州地区高等学校国際教育研究協議会、  
宮崎県高等学校国際教育研究協議会

### 大会概略と特長

ボラキャンの大きな特長の一つ、高校生主体の分科会活動を開始した大会です。

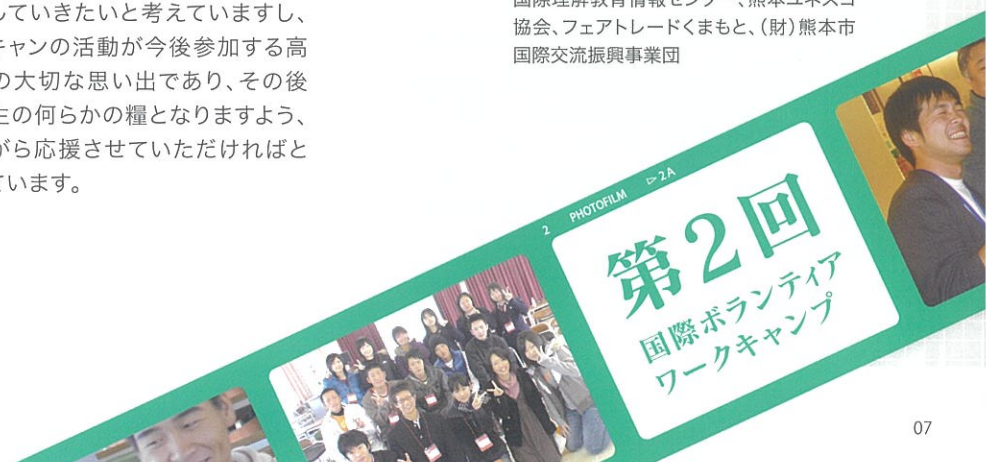
分科会のテーマは、高校生が興味、関心のあるテーマを、国際と結びつけて考えました。

高校生、構成団体\*で実行委員会を作り、月1,2回の会議を行いながら準備を進めました。高校生が自ら企画、当日の大会を運営しました。オープニングではECの発案でフェアトレードファッションショーを行いました。大会全体は、分科会活動を中心に据え、5つの分科会を開催しました。

また、国立青少年阿蘇青少年交流の家での1泊2日の事前合宿を開催、以後のボラキャンの恒例プログラムとなりました。

- 第一分科会 多文化共生
- 第二分科会 国際環境
- 第三分科会 国際協力
- 第四分科会 国際平和
- 第五分科会 国際福祉

※国立阿蘇青少年交流の家、JICA九州国際センター、(財)熊本YMCA、(株)近代経営研究所、NPOヒューマン・ライフ・スクール、国際理解教育情報センター、熊本ユネスコ協会、フェアトレードくまもと、(財)熊本県国際交流振興事業団



PHOTOFILM P.3A

# 第3回

## 国際ボランティア ワークキャンプ

### テーマ

## 環境

### 開催情報

2008年10月25日(土)、26日(日)  
国立阿蘇青少年交流の家

参加者 / 115名(参加費3,000円)  
主催 / 国際ボランティアワークキャンプ  
実行委員会  
構成団体※  
共催 / 熊本県国際協会  
後援 / 熊本県教育委員会、  
熊本日日新聞社、  
(社)日本ユネスコ協会連盟

### 大会概略と特長

前回大会での反省は、各分科会のテーマが地球規模の大きすぎる内容で、理解はできても、なかなか実感が湧いてこなかったということでした。そこで、第3回は、実際に高校生が行っている“スゴイ”を分科会テーマに取り上げました。「同じ高校生だから自分にもできる」を意識して、行動することを目標にしました。

大会終了後に、老健施設訪問して音楽会を開催したり、手作りエコバッグを母子寮の子どもたちへプレゼント、交流したり、活動につながりました。

- 第一分科会 ボランティアを  
一から始めよう!
- 第二分科会 日本、世界の森林の現状  
を知り、私たちにできること  
を考えよう!
- 第三分科会 書き損じハガキ  
プロジェクト
- 第四分科会 転校生は日本語が  
分からない。  
私は日本に来たばかり。  
あなたはどおする?
- 第五分科会 ボランティア活動を  
世界へ発信しよう!

※国立阿蘇青少年交流の家、JICA九州国際センター、(財)熊本YMCA、(株)近代経営研究所、NPOヒューマン・ライフ・スクール、熊本ユネスコ協会、(財)熊本市国際交流振興事業団

## 高校生が考え、行動した「環境」とは

第3回副実行委員長 戸野本 昌平さん  
(九州大学 21世紀プログラム)

第3回ボランティアワークキャンプは「高校生の『豊かな環境』をつくる色々な活動」というテーマの元、高校生の実行委員を中心に企画されました。国際協力・地域活性化・多文化共生・自然環境保護などの多岐にわたる内容を短いフレーズで表すために、何度も国際交流会館で話し合い、家の机で考えを巡らせた思い出があります。放課後、2階の奥の会議室にみんなで集まり悩んでいたのが懐かしい……そんな中行き着いたのが「環境」という言葉でした。

一般的に環境とは自然のことを指しますが、ここでの環境はより広義の、私たちが生活している場をも包括した概念です。遠く離れた国・自然豊かな森林・普段生活している場といった私たちを取り巻くものすべてを同じ言葉で表し、ボランティアをより身近な活動として捉えたいという思いが込められました。当時は今よりも、ボランティアは余裕のある人がやるどこか一般とはかけ離れたこと、のようにみられる風潮があり、私自身そのような目を感じることもありま。そういった周囲の認識に対して、「ボランティア」なんて大層な名前がついているけれど、バスで席を譲るくらい簡単ですぐにできることなんだ、と発信したかったのかなあと思い返しています。

「ボランティアをより身近に」という思いは企画内容にも表れており、前回よりも具体的で今後につながる活動が盛り込まれました。分科会の名称は「国際協力」などの堅い熟語から、「ボランティアを一から始めよう!」といった呼びかけ式のフレーズにして、中身も高校生が現在取り組んでいる内容をきっかけに進めました。国内外で活躍する活動家の皆さまには団体ごとではなく大まかな活動内容ごとに分かれてもらい、個人ごとに自由な質疑応答をお願いしました。最後の全体報告会では分科会ごとの「チャレンジ目標」・参加者ごとの「アクションプラン」を作成し、今後のボランティアにつながるキャンプになるよう工夫を凝らしました。

ボラキャンがスマイルステーション等と連携し通年の活動としても発展している現状を見ると、当時の思いが脈々と受け継がれているようで嬉しさがこみあげます。興梠さん、八木さん、下田さんをはじめ多くのサポーターの方々や、ここまで長くバトンをつないでくれた高校生のみなさんには感謝の気持ちでいっぱいです。これからもボランティアの輪が広がっていくことを、そしてボラキャンの益々の発展を祈っています。



▲音楽活動を続けています。(筆者:前列右端)





▲アフリカ・ウガンダで子どもたちに囲まれる筆者

## これからも、Challengers

第4回実行委員長 内尾 晶子さん  
(九州大学 21世紀プログラム)

国際ボランティアワークキャンプ10周年おめでとうございます。第4回国際ボランティアワークキャンプ(以下、ボラキャン)の実行委員長を務めさせていただきました、内尾晶子です。

第4回ボラキャンは「好奇心+行動力=Challenger」をテーマに実施しました。当時の実行委員はほとんどが高校1年生、企画もボラキャンも初めてで、右も左も分からない初心者ばかりでした。初心者だからこそ、自分たちの好奇心で行動してみよう。今年の自分たちはChallengerでいよう!という思いで、このテーマにしました。でも、当時は本当に何もかも分からず、会議前に事務局の方と打ち合わせして、会議に挑むのに、会議を実際に進めてみると、意見が出なかったり、話し合いが上手くいかずに決めたいところまで決まらなかったり、毎回、会議終了後に会議の反省会をする有り様でした。どうすれば意見が出るのか?今日の会議の何が悪かったのか?ボラキャン新参者な上に、リーダー初心者の私は分からないことだらけの中、周りの協力を得ながら、必死に準備を進めました。そんなボラキャンで私が出た1番大きなものは「仲間」です。意見が合わずにケンカすることも、分からないことばかりで投げ出したくなることもありましたが、その度に励まし合い、きついことを、1つ1

つ仲間たちと一緒に乗り越え、ボラキャンを成功させようとして邁進しました。ボラキャン本番が成功した時には、みんなでやり遂げることでできた喜びと感謝の気持ちで胸がいっぱいだったと、今でも覚えています。

6年経った現在、私は大学で「ウガンダにおける初等教育無償化」について勉強しています。昨年は10ヶ月フランスへの交換留学や2ヶ月のアフリカ滞在等、多くの挑戦をさせて頂く機会がありました。仲間達も今では進学や就職でみんな全国各地にバラバラになってしまいました。しかし、今でも辛い、諦めたいと思った時、遠くで頑張っている仲間の話を聞くと、自分ももうちょっとやってみよう。頑張ってみようと思います。もう2度と同じメンバーで企画することはないでしょうが、ボラキャンの仲間たちは私にとって、どこにいても、何をしても、いつまでも、仲間なのだと感じます。仲間がいるから、アフリカでもヨーロッパでも、どこでも頑張れました。第4回ボラキャンは1度きりですが、その精神と絆は一生ものです。これからも、仲間と共にそれぞれの信じる道を走り続けます。ボラキャンも仲間も大好きです♪これからも、ボラキャンが高校生にとって「何か」を与える場であってほしいと願います。

### テーマ

好奇心+行動力  
=チャレンジャー

### 開催情報

2009年10月24日(土)、25日(日)  
国立阿蘇青少年交流の家

参加者/173名(参加費3,000円)  
主催/国際ボランティアワークキャンプ  
実行委員会  
構成団体※  
後援/熊本県教育委員会、  
熊本市教育委員会、  
熊本日日新聞社  
日本ボランティア学習協会

### 大会概略と特長

前回大会での反省は、アクションプランを実施できたが、1度の活動で、継続的な活動ができなかったということでした。第4回大会では、好奇心と行動力を意識しながら活動を行い、高校の枠を超え月1回、国際交流会館に集まっている活動について情報交換を行うスマイルステーション※2が誕生しました。

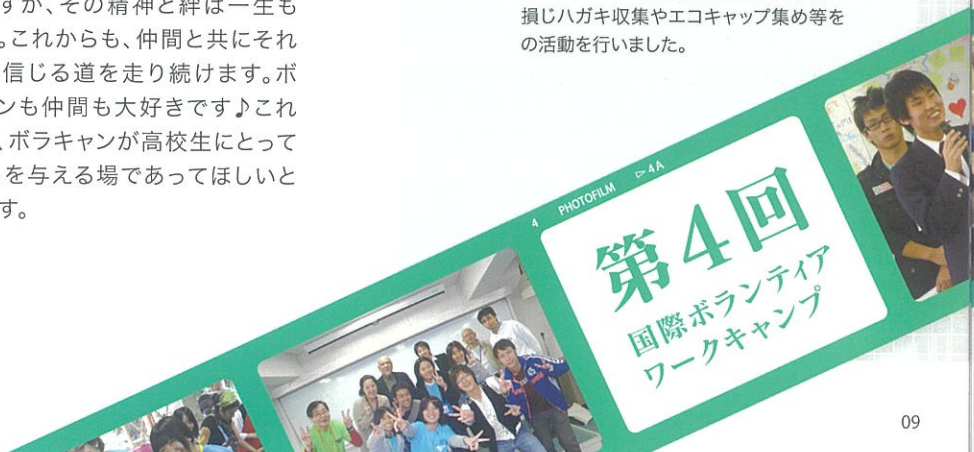
本大会から分科会数が5つから7つに増えました。

ECでお揃いのTシャツを作り、EC間の結束が増しました。

- 第一分科会 社会マナー  
～人との関わり方～
- 第二分科会 思いを形に!
- 第三分科会 ボランティア
- 第四分科会 わたしの地元食
- 第五分科会 多文化共生
- 第六分科会 水守になろう!
- 第七分科会 情報発信

※国立阿蘇青少年交流の家、JICA九州国際センター、(株)近代経営研究所、(株)日本リモナイト、熊本ユネスコ協会、(財)熊本市国際交流振興事業団

※2 スマイルステーション:ボランティアに興味がある人々の笑顔が集まる場です。2009年11月14日(土)に第一回のスマイルステーションが開催され、その後も月一回多くの高校生が集まり、いろいろなボランティア活動の発信、情報交換の場となっています。独自の活動として、書き損じハガキ収集やエコキャップ集め等々の活動を行いました。



# 第5回 国際ボランティア ワークキャンプ



## いろんな出会いがあったボラキャン! これからも「Talk+○○=Smile」!!

第5回副実行委員長 野呂 一葉さん  
(熊本県立大学 総合管理学部)

### テ マ Talk+○○=Smile

#### 開催情報

2010年8月1日(日)～3日(火)  
国立阿蘇青少年交流の家

参加者 / 156名(参加費5,000円)

主催 / 国際ボランティアワークキャンプ  
実行委員会  
構成団体\*

後援 / 熊本県教育委員会、  
熊本市教育委員会、  
熊本日日新聞社  
日本ボランティア学習協会

#### 大会概略と特長

今回から日程が2泊3日となり夏休みの時期の開催となりました。1日増えたことで、分科会活動の充実、また交流を増やすことができました。分科会活動では、阿蘇門前町へ水基めぐりサイクリングや阿蘇保健所へ犬猫の保護の実態視察とフィールドワークもできるようになりました。1日目の夜は、体育館で体を動かしながらアイスブレイキングで参加者同士の交流、友情を育む時間をとれるようになりました。

ボラキャンのテーマソング「キセキの旅」が誕生しました。

ECメンバーが熊本県内の高校から広く集まりました。

#### 第一分科会 夢

Talk+Dream=Smile

#### 第二分科会 日本文化

～継承されていく文化～

#### 第三分科会 外国文化

わたしたちの地域(ふるさと)  
をもっと知ろう!!

#### 第四分科会 環境

CyclingでFeeling

#### 第五分科会 社会問題

Pets can have SMILE  
～ぼくらはみんな生きている～

#### 第六分科会 多文化共生

世界が一つになるには

#### 第七分科会 自己表現

新しい自分探し!  
コーディネーターになろう

※国立阿蘇青少年交流の家、JICA九州国際センター、(株)近代経営研究所、(株)日本リモナイト、熊本ユネスコ協会、熊本留学生交流推進会議、(財)熊本市国際交流振興事業団

第5回のテーマは、「Talk+○○=Smile」でした。このテーマには学校や性別、国籍、様々な違いや立場を超えて人々が会話を通して、お互いに理解しあい、最後にはみんながSmileになれるように、との思いが込められています。

私がボランティアワークキャンプに参加しようと思った理由は多々ありますが、その1つには、それまでの自分を変えたいと思ったから、というのがあります。というのも、それまでは人と付き合うのが億劫で1人であるのが好き、これといってしたいこともないからと何となく日々を送っていました。

しかし高校に入り、全く知らない人と集団生活を通して、人ともっと繋がりたい!何かしたい!と思うようになり、そんな中でボランティアワークキャンプに出会いました。参加者として参加した第4回で同世代の人たちが先頭に立ちキャンプを引っ張っていく姿が、とても輝いていたことと、様々な国や高校の人と短い期間ではありますが一緒に過ごし楽しく新しい経験ができたことが嬉しく、私も実行委員をしてみたいと思い、第5回では実行委員をしました。

ボランティアワークキャンプの実行委員として、仲間や様々な大人の方々の力を借りながらの1年間は、初めての経験の連続でとても刺激的な時間でした。キャンプ当日も、参加者のみん

なやオブザーバーの方々や大学生スタッフといった多くの人の協力で無事に終わることができました。

この文章を書くにあたり、第5回のことを振り返って、考えがまとまらなくて悩んだことや、当日に様々な人と出会い沢山話をして楽しかったこと、参加者のみんなの笑顔といった多くの思い出が蘇ってきました。

私は、ボランティアワークキャンプで様々な国の人や様々な環境で育った同世代に出会い、真正面からぶつかり議論し合えたことで、人と話をするの楽しさを知ることができました。今でもボランティアワークキャンプで出会った人たちは、私にとって何でも話せるかけがえのない人だと思っています。

正直、第5回で実行委員をしていた中では成長の振れ幅は狭い方だとは思いますが、一生に幾度とない機会に副実行委員長を任してもらえたこと、迷惑掛けてばかりなのにやさしく見守ってくれたことは私の記憶の中で温かい思い出として残っています。

これからも長い人生、様々な人と出会っていく中で「Talk+○○=Smile」ができるようにいつまでも心の片隅にこのテーマを置いておきたいと思います。

そして、ボランティアワークキャンプがこれからも末長く続いていくことを切に願っています。



▲熊本県立大学で日々学ぶ筆者



▲阿蘇青少年交流の家バイキングレストラン“輝・来・来”(きらら)は大人気!  
みんなおいしい笑顔です

## 私とボラキャン

### 第6回実行委員長 岩木 陽平さん (鳥取大学 農学部)

このたびは国際ボランティアワークキャンプ10周年おめでとうございます。この活動に関わることができ、本当に良い縁をいただけたなと思います。

私が第6回の実行委員をしてからもう4年も経ってしまったということに驚きです。ボラキャンに関わったきっかけは高校のときに入っていたボランティアサークルでした。第4・5回ボラキャンの実行委員長であり、同じサークルのメンバーでもあった先輩に誘われて国際交流会館に辿り着き、自分は実行委員になるものだと思っていたら本当に実行委員会の会議に参加していました。そして「それならばいっそ」と実行委員長に名乗り出たのが僕のボラキャンに関わっていった経緯です。

それまでボラキャンには全く関わったことがなかったため最初はどうしていけばよいか分かりませんでした。メンバーに恵まれ、テーマ、全体の流れや報告会の新しい方法などすんなりと決まっていきました。しかし各グループに分かれて分科会を作るのは本当に難しく、なかなかうまくいかなかったのを覚えています。ですがこの10ヶ月間で、怠け者の自分、意外とみんなをまとめられる自分、司会進行できている自分など多くの発見があり、確実に自分の中に変化が起きていたなと思います。

そして、そうしているうちに当日になり、2泊3日という時間はあっという間に過ぎ去りました。当日はボラキャンを成功させることに精一杯になっていて走り回っていたのを覚えています。

さてボラキャンを終えた後、僕はどうなったかということ、国際交流会館で別の活動に参加したり、高校で入っていた別の部活に精を出したりした後、これまでの経験を活かせる入試は無いかと探し、鳥取大学のAO入試を受験します。そして大学生になり、グローバルワークキャンプという形で会館での活動を続けていくのですがそれはまた別のお話です。

振り返ってみると高校時代の約3分の1を県下約8校から集まった同じ年頃の仲間達と一緒に一つのイベントを企画・運営するというのは、今考えると本当に贅沢な経験だったと思います。

さて、第6回のテーマ「はじけるTeenagers!」には「参加者にもっと自分の殻を突き破って欲しい!そして自分達も殻を破っていきなさい!」という思いがありました。そして実際僕はほんのちょっぴり皮剥けることができました。10回目を迎えたボラキャンですが、これからも実行委員と参加者の両方の高校生が自分の殻を突き破る機会になることを心から願います。ありがとうございました。

## テ マ

### はじける!Teenagers!

## 開催情報

2011年8月7日(日)～9日(火)  
国立阿蘇青少年交流の家

参加者/156名(参加費5,000円)  
主催/国際ボランティアワークキャンプ  
実行委員会  
構成団体※  
後援/熊本県教育委員会、  
熊本市教育委員会、  
熊本日日新聞社  
助成/子どもゆめ基金

## 大会概略と特長

今大会の大きな進歩は、報告会にローテーション式のポスターセッションを取り入れたことです。7つの各分科会のメンバーが少人数に分かれ、新しいグループを作り各分科会のポスターの前に集まります。ローテーションで移動しながら自分の分科会のポスターでは発表し、他の分科会のポスターの前では発表を聴き、意見を出し合います。発表→質疑応答で10分間を7回行い、最後は自分の分科会に戻り、それぞれどんな質問が出たかを改めて共有します。閉会式では、各分科会の代表がレポーターングします。全員参加型の取り組みに発展しました。

はじめて国立青少年交流機構の「子どもゆめ基金」助成活動へ申請、ご採択をいただきました。

- 第一分科会 福祉
- 第二分科会 環境 ～水と共に生きる～
- 第三分科会 食
- 第四分科会 ボランティア  
～高校生だからこそできること  
in身近なボランティア
- 第五分科会 伝統文化
- 第六分科会 国際交流  
～多国籍若者交流  
プロジェクト～
- 第七分科会 多文化共生

※(株)近代経営研究所、(株)日本リモナイト、  
熊本ユネスコ協会、熊本留学生交流推進会  
議、(財)熊本市国際交流振興事業団



# 第7回 国際ボランティア ワークキャンプ

## 俺が拡げる、君と繋ぐ

第7回実行委員長 増山 雄輝さん  
(千葉大学 看護学部)

### テ マ

Let's Take Action!

～俺が拡げる、君と繋がる～

### 開催情報

2012年8月10日(金)～12日(日)  
国立阿蘇青少年交流の家

参加者/139名(参加費5,000円)

主催/国際ボランティアワークキャンプ  
実行委員会  
構成団体\*

後援/熊本県教育委員会、  
熊本市教育委員会、  
熊本日日新聞社

助成/子どもゆめ基金

### 大会概略と特長

より身近な生活自分自身を豊かにするためのフェアトレードや自己表現というテーマが増えました。2011年に発生した東日本大震災は被災地から離れている九州でも自分達のこととして考える必要があります。「生き残る」をテーマに防災の分科会がつけられました。

2日目の夜に開催していた「国際人と出会おう、(ワークショップ2)」は、今大会より「未来職道」というネーミングとなり、現在も続いています。

これまでのボラキャンの成果が認められ、日本ボランティア学習協会の優れたボランティアの社会実践活動に贈られるアレックディクソン\*\*賞をいただきました。

- 第一分科会 フェアトレード
- 第二分科会 自己表現
- 第三分科会 多文化共生
- 第四分科会 ボランティア
- 第五分科会 国際協力
- 第六分科会 日本文化
- 第七分科会 防災

※近代経営研究所、(株)日本リモナイト、熊本ユネスコ協会、熊本留学生交流推進会議、(一財)熊本市国際交流振興事業団

※2 アレックディクソン博士:世界のボのボランティアの父と呼ばれるイギリス人、1950年代に世界ではじめてボランティアの育成と支援の専門機関(Community Service Volunteers)を創設しました。

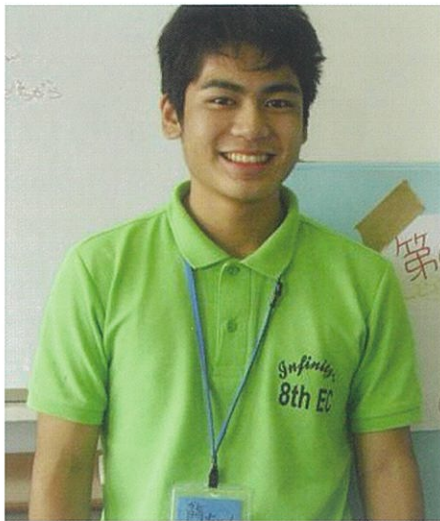
るのですが、そんなときに私を初心にかえらせてくれます。ボラキャンは今の私の原点であり財産だと思っています。今でもそのときの仲間たちと集まることは少なくありません。そう言ったところもまたボラキャンのいいところなのだと思います。

何か自分にできることをしたい、国際交流がしたい、文化を知りたい、それぞれが様々な思いを持って集った仲間たちはとても意識が高く、その仲間との出会いや過ごした日々は当時高校生の私にとって間違いなく刺激的でした。このような機会を与えてくださった熊本市国際交流会館の方々、また支援してくださった団体の方やサポーターの方々には心から感謝申し上げます。そしてこれからも拡げ、繋げていきたいと思えます。

参加者の皆が楽しんでくれるのだろうか、自分たちの思いをうまく伝えることができるのだろうか、キャンプ前日に考えていたことを今でも覚えています。「Let's take action 俺が拡げる、君と繋ぐ」これが第7回のテーマ。自分の思ったことをもっと自由に行動、発信しよう、そう決めて始めた第7回。準備段階では話し合っただけで悩んでの繰り返し。それぞれが自分の心の中にある言葉に表せないような気持ちをどう表せばいいのかを考え、約半年かけて練習続けました。当日は想像以上に参加者との交流が深まり、いろんな人が自分の思ったことを言い合い、分科会はもちろん、個人個人が自分を知ることによって成長することができた3日間になったと思います。自分の夢について熱く語り合ったあの時間は本当にいい思い出です。私は今県外の大学に通っていますが、その中でこのボラキャンのことを思い出すことがよくあります。大学の授業を受け、部活動に励み、課題とバイトに追われる日々を過ごしていると、何か自分の中にあったはずの信念がうやむやになったり忘れかけてしまうことがあ



▲阿蘇の大草原でハイポーズ、ピース!(筆者:前列左から2番目)



▲熊本県立大学に入学しました!

## 私とボラキャン、∞の可能性

第8回副実行委員長 門岡 由起さん  
(熊本県立大学 文学部)

私は、第5・6回で一般参加者として、第7・8回で実行委員としてこのワークキャンプに参加しました。私には外国のルーツがあり、自分の経験を多文化共生の分科会でシェアしてくれないか、とある日本語の先生からの誘いがあったこのワークキャンプに参加するきっかけとなりました。第5回の際は私はまだ中学2年生でしたが、自分の体験を他の人に共有すると同時に私自身も他の人の意見や考え方に触れることができ、多文化共生について理解が深まったと思います。また、実行委員の先輩方の姿を見て、自分もリーダーシップのある、視野の広い人でありたいと思いました。とにかく何もかも刺激的で学ぶことがきつとたくさんあるはずだと期待して参加し続けました。高校生になり、実行委員の立場で参加させていただきました。スタッフの方々の力を借りながら自分たちで最初から企画しなければなりません。実行委員会議ごとにそれぞれのテーマについてだんだんと深みが出てきて、それをみんなで共有し合います。自分の分科会についてだけでなく、他の分科会についても学べました。もちろん意見が合わず、お互いぶつかることもありましたが、それはそれで私たちにとって大事なプロセスではないかと思えます。以前何回も参

加していたけれども、やはり実行委員の立場になると最初は成功するかとても不安でした。結局本番では自分たちのメッセージを伝えることができ、参加した方々は満足いただけただようでもやりがいを感じる事ができました。

ボラキャンで過ごした時間はとても有意義なものでした。新たなつながりができたり、大切な仲間ができたり、より積極的に物事に関わるようになり、そしてリーダーシップを発揮させてくれました。自分も将来、国際的に活躍したいと思い、高校時代にボラキャンが幅広い視野が得られるような機会を与えてくださったことに心から感謝しています。これからもボラキャンはさらに進化していくとともに、高校生に刺激を与えられるような企画であり続けてほしいと願っています。

### テ マ

∞(無限大)の可能性  
～私たちは進化し続ける～

### 開催情報

2013年9月14日(土)～16日(月)  
国立阿蘇青少年交流の家

参加者/102名(参加費5,000円)

主催/国際ボランティアワークキャンプ  
実行委員会  
構成団体\*

後援/熊本県教育委員会、  
熊本市教育委員会、  
熊本日日新聞社

助成/子どもゆめ基金

### 大会概略と特長

今大会は秋期開催となりました。高校の文化祭、試験と重なりましたが100人以上が集いました。

また今年度、ボラキャンのOB/OGを中心とした大学生が企画運営する国際交流とグローバル人材の育成をテーマにしたグローバルワークキャンプがスタートしました。ボラキャンの世代を超えたつながりです。

閉会式では、参加者みんなでダンス、ダンス～弾けました。

- 第一分科会 食糧問題
- 第二分科会 自己表現
- 第三分科会 多文化共生
- 第四分科会 教育
- 第五分科会 国際ボランティア
- 第六分科会 地域おこし
- 第七分科会 食育

※(株)近代経営研究所、(株)日本リモナイト、  
熊本ユネスコ協会、熊本留学生交流推進会  
議、(一財)熊本市国際交流振興事業団



PHOTOFILM 8A  
第8回  
国際ボランティア  
ワークキャンプ

# 第9回 国際ボランティア ワークキャンプ

## 思いやりの輪 ～みんな同じ空の下～

第9回実行委員長 松崎 真理さん

(福岡ホスピタリティ&ブライダル専門学校 心のおもてなし科 葬儀ディレクターコース)

第9回ボランティアワークキャンプのテーマ・サブテーマは「思いやりの輪～みんな同じ空の下～」です。テーマを決める際にみんなで出し合ったキーワードは「優しい・温かい・つながり・世界の輪・ぬくもり・いつも青い空」などの優しく温かいものが多く出ました。そこからテーマはボランティアに参加する、ボランティア活動することでみんなの思いやりの気持ちであふれる。というイメージで「思いやりの輪」にしました。

サブテーマは世界中から集まって交流をした仲間が2泊3日のボラキャンが終わり、それぞれ家に帰った後でも「同じ空の下」につながっているというメッセージを込めて決定いたしました。

今回のテーマ・サブテーマにはボランティア活動で温かい気持ちになれるのは受けている側だけでなく、ボランティア活動をする私たちも温かい気持ちになれるということ、そして、同じ活動をした仲間とはたとえどんなに離れても同じ空の下つながっているという思いを込めました。私たちは第9回ボランティアワークキャンプのあと、温かい気持ちになり、仲間とつないだ輪をさらに広げ、いつか世界中の人と大きな思いやりの輪をつなぎたいと思っています。

第9回ボランティアワーク本番、1日目の夜の交流会「キャンドルサービス」では大きな変更があったり、予定よりも大幅に遅れが生じてしまったりと、トラブルが絶えませんでした。ECの仲間の臨機応変な対応と、参加者の楽しそうな表情にみんなの優しさと思いやりを感じました。今回の7つの分科会のタイトル「ふれあい」「自己表現」「国際交流」「多文化共生」「観光」「国際ボランティア」「食育」でそれぞれの分科会で話し合ったこと、感じたことが「思いやり」や「つながり」に通じ、閉会式の閉会の言葉で「思いやりの輪をつなぐことはできましたか」という問いに全員が「YES」と答えてくれたとき、このテーマにしてよかったと心から感じました。

### テーマ

#### 思いやりの輪

～みんな同じ空の下～

### 開催情報

2014年8月15日(金)～17日(日)  
国立阿蘇青少年交流の家

参加者/147名(参加費5,000円)

主催/国際ボランティアワークキャンプ  
実行委員会  
構成団体\*

後援/熊本県教育委員会、  
熊本市教育委員会、  
熊本日日新聞社

助成/子どもゆめ基金

### 大会概略と特長

実行委員の演出が際立ちました。オープニングでの寸劇、「七つの国を巡る旅」では、今から始まるボラキャンの7つの分科会への問題提起ができました。交流会は雨のため急ぎょ室内でキャンドルサービスの集いでアイスブレイク、閉会式では大きな大きな友情の輪ができました。

- 第一分科会 ふれあい
- 第二分科会 自己表現
- 第三分科会 国際交流
- 第四分科会 多文化共生
- 第五分科会 観光 ～おもてなし～
- 第六分科会 国際ボランティア
- 第七分科会 食育

※(株)近代経営研究所、(株)日本リモナイト、  
熊本ユネスコ協会、熊本留学生交流推進会  
議、(一財)熊本市国際交流振興事業団



▲オープニングの劇「七つの国を巡る旅」(筆者:ステージ右から2番目)



▲分科会活動のあい間にレストランにて(筆者:左側)

## 素晴らしい出会いと思い出をありがとう

第10回実行委員長 塩崎 理子さん  
(文徳高等学校)

10周年を迎えた国際ボランティアワークキャンプ in ASO。その第10回の実行委員長をさせて頂いたことをとても嬉しく思います。

私事ですが、ボランティアに興味を持ったのは11歳のとき、地元のボランティアグループとSmile Station(スマステ)との交流からでした。それまでなんとなく参加していた会でしたが、当時スマステのメンバーだった先輩方を拝見し、衝撃を受けました。高校生だけでテキパキと話し合いを進めつつ、笑顔を絶やさぬその環境は私の憧れになりました。

そのスマステを生み出したのがボラキャン。留学生50人、高校生100人が3日間同じ場所で同じ時をすごします。分科会活動をはじめ様々な内容があり3日間はあっという間です。

初めてのボラキャンは参加者としての第9回でした。スマステに参加していた私は、メンバーの先輩方が実行委員(EC)をされるボラキャンに興味を持ち参加しました。当日私は、集合から閉会式までECの方々がキャンプを進行しつつ常に参加者に目を向け気にかける姿を見ました。それが以前憧れたスマステの先輩方と重なり、次は自分もECをしたいと思

ました。

ECになって気づいたことがあります。それは1から物事を企画するということは非常に大変だということです。ボラキャンで言うと全体の日程や分科会での活動など様々なことを調べ考える必要がありました。12月の初EC会議から本番の8月まではとても早く、特に本番前2ヶ月程では準備がなかなか進まない状態の中、メンバーにきつい言葉をかけてしまったこともありました。

不安を残したままのボラキャン本番でしたが、ECメンバーもよく動いてくれてスタッフの方々にも大いに支えられ、何より参加者のみなさんが楽しいと言ってくれたことに一番感謝しています。閉会式の前「あなたがECでよかったです」という参加者の方の言葉、解散の時の皆さんの涙。ECをしなければ経験しなかったことだと思います。

素晴らしい出会いと経験を与えてくれるボラキャンに感謝しています。これからもボラキャンで学んだことを糧に様々なことに挑戦していきたいです。

### テーマ

Try, Evolve to the Next age  
～共に進もう輝く明日へ～

### 開催情報

2015年8月7日(金)～9日(日)  
国立阿蘇青少年交流の家

参加者/134名(参加費5,000円)  
主催/国際ボランティアワークキャンプ  
実行委員会  
構成団体\*

後援/熊本県教育委員会、  
熊本市教育委員会、  
熊本日日新聞社

助成/子どもゆめ基金

### 大会概略と特長

10回の記念すべき今回のボラキャンは、10年の歩みを集大成した大会となりました。事前の準備や資料作成、当日の運営等、流れるようにできました。

分科会では、多文化共生、地球環境、ボランティアという定番的なテーマから、サブカルチャーという話題性のあるテーマが取り上げられました。

- 第一分科会 医療
- 第二分科会 貧困
- 第三分科会 多文化共生
- 第四分科会 地球環境
- 第五分科会 ボランティア
- 第六分科会 防災
- 第七分科会 サブカルチャー

※(株)近代経営研究所、(株)日本リモナイト、  
熊本ユネスコ協会、熊本留学生交流推進会  
議、(一財)熊本市国際交流振興事業団



## 育っていく子どもたちを見守りながら (多文化共生の分科会に携わって)

NPO外国から来た子ども支援ネットくまもと 竹村 朋子さん(写真:左端が筆者)

第1回目から参加し、多文化共生分科会のオブザーバーとして関わってきました。この分科会は、外国から来た子どもたちを阻む「言葉の壁」「文化の壁」を彼らの実体験を通して、一般参加の日本人生徒に伝える貴重な機会です。実行委員の生徒は、自分の体験を客観的に捉え、他の人に伝えることで内面的にも大きく成長し、また、軽い気持ちで参加した一般参加の日本人生徒も多文化共生社会について自分のこととして真剣に考えるようになります。この両者の成長を目の当たりにできるのも、オブザーバーの醍醐味です。異文化に対して広い視野を持つようになった生徒が社会人となり、多文化共生の社会に向けて第一歩を踏み出してくれると確信しています。



## ボラキャンへの想い

熊本ユネスコ協会 副会長 橋村 隆介さん

高校生・大学生にとって、この期間の人生は生涯において最も大切な学びの時期であり、発展できるときであります。このボラキャンを企画運営され、参加されることは広い世界に羽ばたくための絶好の機会であります。私にとっても非常に良い学びの機会であります。今後もさらなる次の10年をめざし継続され、いろいろな環境の中で育つ多くの若い人々と交流され、自己研鑽に励んでいただき平和に貢献されることを期待いたします。

## 共に歩む!

フリーザチルドレンジャパン熊本 岩坂 省吾さん

貧困や児童労働のない世界とより良い社会造りを目指し活動するFree The Children Japan KUMAMOTOとして、ボラキャンの理念はとても共感できる活動です。

高校生が自ら考え行動、運営していく中、共に歩みサポートする事は、高校生と私達サポートする大人が共に歩み、学び合う場でもあり、かけがえない大切な時間です。世代を超えた取組みから、高校生が素晴らしい社会のリーダーとして育ち、より良社会造りの礎になっていくことを願います。



## 天国の榊先生へ

八代高校(教師) 岩下 ハヤミさん

(写真:左端/黄色のTシャツが筆者)

先生との出会いは16年前、私が熊本高校に赴任し、ボランティアサークルを立ち上げ暗中模索しているときです。壁にぶつかるたびに、「先生、3年踏ん張りなさい、必ず生徒が答えを出してくれます」と背中を押し、行く道を示唆していただきました。先生が種をまかれたボラキャンはこの10年で多くの花々を立派に咲かせています。その花は世界中に広がり、これからますます世界の平和のシンボルになり、子供たちを笑顔にしてくれる力になると信じています。これからも見守り、子どもたちの行く道を照らしてください。

## 一緒に「ボランティアってクール!」で Go ahead!

立命館アジア太平洋大学 アドミッションズ・オフィス 藪田 庸子さん(写真:右から4番目が筆者)

高校生が企画運営、100人超えの大キャンプ。なんて魅力的な響きでしょう!しかも阿蘇!APUの国際学生を呼んでいただけるとはなんて、素敵!! 彼らにとって、日本の高校生と直接触れ合えるということが本キャンプ参加の一番の魅力です。だから未来職道で母国の紹介のときが一番生き生きしています。

彼らのほとんどが来日までまったく日本語ができません。それでも日本に留学しようという決意には、将来誰かの役に立ちたい、祖国の抱える問題を解決したい、アジア太平洋地域の抱える問題を解決したい、という強い意志があります。だから高校生が自らボランティアを学ぼうとするこのキャンプを応援したいのです。素直に「困っている人を助けたい」ってグローバルだしクールよね。

国際学生と交流し、いろいろな国のAPU生たちの「将来の夢」に触れてほしいなと思います。「キャンプの高校生が入学、APハウスで僕の寮生になったよ!」と目をキラキラさせ話すナイスガイたちです。





## ボラキャンについて 熊本市国際交流振興事業団 下田 隆文さん

毎年夏に行われるボラキャンは前年の秋から実行委員会を組織して何度も会議を行いながら夏の本番を迎えるわけですが、この実行委員は毎年、組織するメンバーが様々な個性を持っており、その年毎での特色が見られます。

実行委員が発足した秋には期待を抱き、冬には違和感を覚え、春に焦りを感じ、夏には不安とともに本番を迎え、そして大会期間中に感心させられ、大会後には、本当に頼もしくなった姿に感動させられます。ボラキャンを通して「人が成長する」という貴重な体験をさせていただいております。

高校も、学年も時には国籍も違うメンバーが集まり協力して作り上げる「ボラキャン」が今後も続けていけるよう頑張っ参りたいと思います。



## ボラキャンの10年を振り返る～巻き込む力、巻き込まれる力

熊本市国際交流振興事業団 勝谷 知美さん

ボラキャン…振り返るともう10年…早いですね。最初は私たちも手探りでした。でも、学生たち自分たちで考え、行動する。一人じゃなくて色々な人たちを巻き込んで身近なところから変えていく。学校の中だけでなく、広い世界とつながる…こんなことをイメージして関わってきました。ボラキャンの実行委員たちは、苦しみながら(笑)、時に楽しく、時に言い合いもしながら当日を迎えてきました。それらすべてが彼らの財産となり、彼らの未来に繋がっていただければと願っています。

## 国際ボラキャン10周年おめでとうございます。

近経ファーム&くまもといくに会一同

世界の阿蘇で、200人近い高校生、大学生、留学生が一同に集まり、参加者自ら社会的諸問題について調査、研究、討論、企画体験したと聞きます。若い時のこのような時間は、人生において未来の貴重な財産となります。目一杯若いエネルギーをぶつけてあげてください。きっと素晴らしい人生が開けるはず。皆さんの今後の活躍を期待します。

私達は、サポーターとして応援します。



## ボランティアワークキャンプ10周年に寄せて

国立阿蘇青少年交流の家職員一同

国際ボランティアワークキャンプ10周年おめでとうございます。

毎回のことながら、生活習慣の異なる留学生が来られることに気を揉むのですが、実行委員の高校生の皆さんが事前に研修され、生活面や事業内容を理解した上で、施設の利用方法、マナーをきちんと伝えていることに感心しています。

今後とも、創造性、チャレンジ精神、リーダーシップやコミュニケーション能力等をさらに高め、国際交流の一翼を担いながら飛躍されることを期待しています。

## ボラキャン10周年記念「このつながりを未来へ」応援メッセージ

JICAデスク熊本 大野 章子さん(写真:後列右から2番目が筆者)

10周年おめでとうございます。

高校生が、学校の枠を超え自分たちで企画・運営を行うことは、大変貴重な機会です。若者の視野を広げ、行動力を育み、国際協力を肌で感じる機会は、次世代の人材育成に大きく寄与していると思います。

高校生の皆さんの成長を頼もしく(そして羨ましく)感じながら、これからも応援していきます!



## 「祝!熊本ボラキャン10周年」

前宮崎県高文連国際・ボランティア専門委員長 有里 泰徳さん(写真:前2列目右端が筆者)

長く続いた、「カツブン」「全国高校ユネスコ研究大会」が終了となる中、21世紀を生き抜く力を育み、地球市民としての資質を磨くことを目的に始まった「ボラキャン」も10周年。

長年、熊本・宮崎・九州・全国で行動を共にしてきた同志、故榊先生。実に感慨深いものがある。出会いは1986年度の九州ブロックユネスコ活動研究大会あたりか。会議や大会等では同宿。人並み外れた鋭い感性で熱く語るその独特の風貌は忘れることができない。経年およそ30年。今でも亡くなったとは信じがたく、悩まされたいびきの音色?と突然かかってくる電話を懐かしむ今日この頃。次なる10年へ新たな飛躍を祈念しています。

## 参加者の思い出



自分と違う高校・国籍の人、大学生や社会人。ボラキャンで、違う環境にいる人と交わることの楽しさを知った。感謝。

熊本県 県南広域本部  
高野 健太さん  
(第3回参加)



「熊本でもできるんだ!」私の価値観を変えたボラキャン。これからも熊本の高校生の可能性を広げてください!

千葉大学法政経学部  
田代 智也さん  
(第8回参加)



沢山の方と出会い、沢山のことを教えて頂き、挑戦と探求心を学んだ。またボランティア活動をしたい!

日産プリンス熊本販売(株) サービス課  
山下 史令さん  
(第6回参加)



ボラキャンは私にとって青春でした!ここで沢山の仲間と出会い、かけがえのない経験ができました!!

熊本信愛女学院高等学校  
小田 彩美さん  
(第9回参加)



第5回のボラキャンに参加させていただき、今もその縁で様々な活動をさせていただいています。

メディカルカレッジ青照館 言語聴覚療法学科  
西田 涼基さん  
(第5回参加)



自分の中の常識をみつめ直し、自身の志を持ちながらチームをエンパワーメントさせていく大切さを学ぶことが出来ました。

ドリームラボ  
津田 美矩さん  
(第2回参加)



## 国際ボランティアワークキャンプ in ASOテーマソング「キセキの旅」

作詞:内尾 晶子さん 作曲:森下 公貴さん 編曲:岩坂 省吾さん

石ころは川に落ちていく  
まだ見ぬ道の世界へ  
川の流れはとても速く  
石を押し流していく

一人ぼっちの石ころは  
旅の途中でたくさんの  
石と出会ってぶつかって  
重なり合って輝きだした

とんがっていた 心も  
だんだんと少しずつ  
まるくなって行く

ひとりひとり皆違う色で  
誇らしげに輝いている

虹色の奇跡を起こそう  
僕らみんなキセキになって  
進んでいこう

今まではよく泣いていた  
無力な自分が情けなくて  
でもそれは当たり前だったんだ  
一人じゃ何もできやしない

笑ったり怒ったりしていく中で  
皆が気付かせてくれた  
そんな素敵な仲間  
「ありがとう」って伝えたいんだ

今度はたったひとつ  
自分だけの  
大海原を目指していこうよ

ひとりひとり皆違う色で  
誇らしげに輝いている

笑い合えばその笑顔で もっと 僕ら  
輝けると皆が僕に教えてくれたんだ

ゆっくりでいいさ 皆で  
広い海を目指していこう

虹色のキセキを起こそう  
僕らみんなキセキになって  
進んでいこう



## 国際ボランティアワークキャンプ in ASO 10周年記念誌 ～10年間の“<sup>つながり</sup>継”～の発行にあたって(お礼)

ボラキャンの10周年記念企画を考えはじめたのは、ちょうど1年前、2015年3月でした。記念イベント開催と記念誌発行と決め、8月の第10回ボラキャン会期中に、興梠寛さん、分科会アドバイザーや運営大学生サポーターの方々10名程度にお集まりいただき当該企画会議を行いました。10年間の歴史を振り返りながら、ECメンバーが大会終了即日に思ったことが出来ず涙を流し反省会をしていたこと、壁にぶつかり乗り越えながら半年以上をかけ準備していたこと、破天荒だった榊定信さんの思い出等々が話されました。

ECメンバーや参加者一人ひとりの顔が浮かんできます。ボラキャン会期中に限らず、EC会議や事前合宿、夏休み、お正月や成人式とボラキャンOB、OGが帰ってきて、後輩たちへのアドバイスや近況報告をしてくれるようになりました。

“ボラキャン”をキーワードに、世代が<sup>つながり</sup>継、共に必要とし助け合いながら、発展してきました。このことから、本誌のサブタイトルに世代が糸のようにつながってきたイメージから「継」という漢字を使わせていただきました。この10年間の世代間の“継”の<sup>つながり</sup>継を、さらに11年、15年、20年と発展させながら、「国際」、「ボランティア」以外の「環境」、「福祉」、「災害」、「地域づくり」等々多様なボランティア分野で活動している高校生、大学生との“横”の<sup>つながり</sup>継を意識しながら、若い世代の「生きる力」を育む場とネットワークを拡げていきたいと考えています。

文末になりましたが、これまで“ボラキャン”を支えていただきましたご協力とご支援へのお礼を申し上げますとともに、今後も“ボラキャン”を末永く見守っていただきますように心よりお願い申し上げます

2016年3月12日

国際ボランティアワークキャンプ実行委員会

ボラキャン10周年記念誌 編集委員長 八木 浩光

### 編集後記

編集委員は公募によるメンバーです。

2015年10月から1・2回、国際交流会館で編集委員会を開催しました。

学校でのつらい経験を発表したり、色んな国の人たちと交流したりする事で、今までの暗い自分を解放してくれたボラキャンのことを思い出しました。(池端誠也)

着実に歴史を刻んできたボラキャン、榊先生を始め多くの高校生や関係者の皆さんの想いにふれ、改めてボラキャンの原点を見つめ直しました。(岩坂省吾)

この冊子の作成に携わったことでボラキャンの楽しかった思い出を振り返ることができてよかったです！(門岡由起)

記念誌に掲載する写真の選定。写真の量が多く、作業は難航。ボラキャンが積み上げてきた歴史の重みを感じました。(高野健太)

ボラキャンで出会った人との繋がりは一生大事にしていきたいです。ボラキャンは“青春”そのものです！(宮本芽衣)



今回、編集委員として写真選びに1度参加させて頂きました。6、7年ぶりに写真を見て、忘れかけていた当時のボラキャンへの熱い想いや共に頑張った仲間達の姿を思い出し、原点に帰ることができました。楽しかったです。

(内尾晶子)

ボラキャンでの楽しい記憶をゆっくりと思い出させていただくよい機会になりました。ありがとうございます。

(松崎真理)

ボラキャンの写真を眺めていて、たくさんの笑顔があり、参加者や関係者の楽しさが伝わってきました。

(大和賢佑)



〈表紙イラスト〉 宮本芽衣さん（尚綱高等学校／第9回実行委員）

\* 翼を拡げ、羽ばたき、大空へ飛び出していく姿をイメージしました。

〈裏表紙イラスト〉 松崎真理さん（福岡ホスピタリティ&ブライダル専門学校心のおもてなし科葬儀ディレクターコース／第9回実行委員長）

\* 10年間の「つながり」と進歩を、人と線路で表現しました。

発行：国際ボランティアワークキャンプ実行委員会（2016年3月12日）

ブログ：<http://blog.goo.ne.jp/smilesta>

事務局：一般財団法人熊本市国際交流振興事業団 電話 096-359-2121